西住まほの漸進的横滑り旅行

jeux

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すごくネガティブシンキングなまほお姉ちゃんが、なんかこう、よくわかんなくなっちゃうお話です。

目次

1. Einleitung: Fei er 1

2. Sammein 13

1. Einleitung: Feier

普段はシャッター街となっている商店街。しかし今夜ばかりは通りは屋台の白熱電球に照らされていた。そこそこの人混み。心地よい喧騒。通りの突き当たりには大きな鳥居。がらんがらんという鈴（正式名称はなんと言ったであろうか）の音。続いて手を叩く音。それは、リズムを合わせようとしているのか、していないのか、パラッ、パラッとばらけた。

「さて、お参りも済んだことだ。何にしようか」

「あれ、何お願いしたか聞かないの？お姉ちゃん」

「そういうのはあまり気軽に人に聞くものでもないだろう？」

「そうかな。私たち姉妹だよ？」

「だからこそだと思うんだ」

「そうなのかなぁ」

私、西住まほと妹のみほは、夏休みということでそれぞれの住む学園艦から地元熊本に帰省していた。

今年の４月から、みほがそれまで私と共に通っていた黒森峰から大洗女子に転校して

いたこともあり、このように二人で夜を過ごすのはかなり久しぶりだった。

「あ」

屋台の並ぶ通りを歩いていると、みほが一つの屋台に目を留めた。側面には丸い文字で「めあごんりこぼ」と書いてあった。

「ボコりんごあめだ！」

みほは目を輝かせる。見ると、りんごに二つのぶどうがクマの耳の様にくっつき、さらに包帯を巻かれたクマの顔（もしかしなくても、着色料だ）が描かれたものが売られていた。

私は、それが些か近寄りがたい様相を呈していることには特に言及せずに値段を尋ねようとするが。

「あああっ、ボコたい焼きだ！」

みほの視線は別の方向に移っていた。その先にはクマと鯛が絶妙に気持ち悪く融合したキメラがケースの中に所狭しと並んでいた。所謂食品サンプルというやつである。一番右のサンプルは頭部がぱっくりと割れており、中から白いわたの様なものが飛び出していた。

ボコられグマのボコ。喧嘩っ早く、どんな奴にでも勝負を挑んでは完膚なきまでにボコボコにされ、（性懲りも無く）何度でも立ち上がる。

みほはそのキャラクターが大好きだった。「大好き」の前に「病的なまでに」をつけてもいいのではないかと思うほどに。ボコ関連のことならば大凡彼女は知っている。どのくらいかというと。

「すごいんだよ。あのお菓子のデザイナーはあの有名な権田原彩峯（ごんだわらさいほう）さんなの！しかもね、あれ中に入ってるの綿菓子なんだよ。製造会社の大洗製菓が、綿菓子が熱で溶けるのを防ぎながら焼き上げる製法を特許申請中なんだって！」

このくらいである。

みほが小学5年生の時にハマりだしたころは突っ込んだりしたものだが、もう慣れていた。

「そうなのか、それはすごいな。で、どっちに並ぶんだ？」

みほはハッとして辺りを見回す。どちらの屋台にも（なぜか）長蛇の列ができている。かなり時間がかかりそうだ。この様子だと、どちらか一方、ということになるだろうか。右、左、右、左と迷子の様に視線が泳ぎ、ついにはこちらに顔を向けてきた。な、なんて顔をしているんだお前は。こんな顔をされてはどうにもたまらない。

「わかった。手分けしよう。みほはりんごあめ、私はたい焼きの方に並ぶから。向こうのベンチが並んでいる場所で集合だ」

するとみほの顔がパアアアアッと明るくなり。

「うん、ありがとう！お姉ちゃん！」

キメラ焼きの長蛇の列に並ぶ最中、私は際限なくふつふつと頭の中から湧き上がる考えをどうにかしようとしていた。戦車道のことである。

西住流の体現者。私はそう呼ばれてきた。日本の戦車道の一翼を担う一大流派、西住流。それを受け継ぐことができる者であることに、もちろん誇りを感じていた。皆私を天才だ、神童だと言った。別にいい気分にも、悪い気分にもならなかった。西住流を継ぐ。後世に伝える。ただ一つの使命。それさえ達成すればよかったのだから。他人のいうことにいちいち反応する道理はない。

しかしみほはどうであったか。みほは、全く関心を持たれなかった。みほ？ああ、神童まほの妹さんね。あの、内気そうな。とりあえず戦車に乗らせておけばいいんじゃないか。まほさんの、西住流の顔を汚さない程度に戦車道ができればいいだろう。西住流の内外問わず、その様な声が平気で聞かれた。

でもお母様は違った。お母様は私だけでなくみほにも西住流に従うことを強いた。

お母様と周囲の人間の認識の差。それが中学生になったみほにいじめをもたらした。みほは、お母様の教えに忠実に従おうとした。西住流らしくあろうとしていた。周囲はそんなことを求めていなかったから、何を生意気な、となるのも当然。

私といえば、みほのいじめには気づいていなかった。あっ、なんということだ。私は！みほの！いじめに！気づけなかったのだ！

みほの危機に何も気づかぬまま、私が中学3年生の秋、黒森峰中等部戦車道部の隊長の時に紅白戦を実施した。白組は私が隊長。赤組はみほが隊長だった。みほの隊長としてのデビュー戦だった。私は挨拶の時みほに、ほんのちょっとした励ましのつもりで、自由にやればいい、お前のやり方で立ち向かってきなさい、と言った。結果は白組の勝利。皆当たり前だと言った。しかし私は興奮していた。みほのあの作戦。あの動き。私の知らない戦車道がそこにあった。間違いない。

みほは私を超える。

その日、私はみほを高く評価した。皆の前で褒めちぎった。それはもう嬉々とした表情で。隊長、あんな顔できたんだ、と言われるほどに。あああっ、これでは！よりにもよって！私が！みほを！処刑したも同然ではないか！

いよいよ、みほのいじめは深刻になった。いい気になるな。あんなものは邪道だ。隊長の贔屓だ。生意気な。生意気な。

第62回戦車道高校生大会決勝。その日になって初めて、私がみほに何をしてきたのか、気づくことになった。皆みほを罵倒していた。もはや私に隠そうともせずに。

……。

馬鹿すぎる。
絶望的に、馬鹿すぎる。
４年間、私はみほの何を見ていたのだ。
何が西住流を継ぐだ。何が後世に伝えるだ。妹一人守れない人間が？笑わせる。
挙げ句の果てにである。一年後、私は決勝戦で何を感じた？素人率いるみほに撃破されてどう思った？
〝これで、償えたのかな〟
ふざけるな。死ね。
此の期に及んでお前は自分のことしか考えていないのか！
今日だってそうだ。お前は神社で何をお願いした？
〝西住流の繁栄。黒森峰の繁栄。それと…みほと私とを仲直りさせてください〟
死ね。死ね。死ね。

「……さん」
死ね。死ね。殺す。
「……さん？」
殺す。殺す。呪ってやる。

「お客さん！」
　はっ。
「……お代」
「あっ……はい。すみません。ふたつぶん…」
「ふたつはダメだよ」
「えっ」
「一人一つだよ。書いてあるでしょ」
「あっ……すみません」

　キメラ焼きを持ってベンチの並ぶスペースに行くと、すでに着色ペイントりんごをなめているみほを見つけた。持っているりんごは一つだけだった。向こうも一人一つだったのだろうか。
　いや待て。私は『ふたつ買って来てね』とは言っていなかったじゃないか。『私も欲しい』とすら言っていない。というか、私は欲しかったのか？着色りんごが？そもそも、なぜみほが私の分まで買って来てくれる前提で考えてるんだ？
「お姉ちゃん？」
「あ、ああ、みほ、お待たせ。ほら、キメ…ボコたい焼きだ」

「ありがとうお姉ちゃん。じゃあ、一口貰うね」

キメラ焼きを手渡す。

「はい、お姉ちゃんこれ」

「お、おう」

着色りんごを手渡された。

さて。これはどういう意味であろうか。食べていいという意味であろうか。キメラを食う間持っとけという意味であろうか。その判定のために、着色りんごの状況を観察する。耳を表すぶどうふたつはすでにもぎ取られている。悪趣味なクマの絵柄は滲んでいる。これはすなわち、この面は舐められていることを示していた。これを舐める？ダメダメ。姉妹だからノーカン？だからこそダメなんだ。脳内の論理回路が答えを出力する。これは後者だ。粛々と、着色りんごのお守りをするのだ。待てよ。『一口貰うね』とはなんだ。それはキメラ焼きが私のものであるという前提があって初めて成立する発言ではないか。であるならば、着色りんごを渡されたのは「交換しようよ」という意味を持ちうる！やった――！しかぁし！それでもやはり待てぇ！これはどう考えてもみほの唾液にまみれている。だって滲んでいるじゃないか顔が。ん？裏側は？裏側は大丈夫だったりしないか？セーフティーゾーンではないか？いやそうに違いない！よっしゃ裏側からせめてやるぜあああでもそうするとみほが私の唾液を

「はい、美味しかった」
「おう」
おかえり、キメラ焼き。
「はい」
「ありがとうお姉ちゃん」
さようなら、着色りんご。
ふう。危機（？）は去った。
先ほどの発言により、キメラ焼きは私のものであることが保証されている。気兼ねなくいただくことにしようか。
と、手元のモノを見ると。
下半身であった。クマの二本の丸っこい足。股の間から鯛の尻尾が生えている。形状が形状なので、綿菓子はほとんど入っていない。生地だけだった。
「なあみほ」
「なに？」
「一口って言ったよな」
「うん」
「一口って言ったよな」

「うん」
「一口って言ったよな」
「うん」
「……」
「……」
「そうだな…一口だな…」
南無三。お前は何をしているんだ。責めているみたいじゃないか。お前はなぜそんなに綿菓子に執着しているんだ。
「……」
言わんこっちゃない。黙っちゃったじゃないかみほが。どうする。どうするまほ姉貴。話題。話題転換が必要だ。話題。話題。話題。
その時、視界の端に現れたのは。
「ああっ。みほ、ボコの顔はめパネルだぞ！」
「……」
「しかもあれは…劇場版『火刑台の上のジャンヌ・ボコク』で劇場公開後２日でカットされ、地上波にもＤＶＤ・ＢＤにもついにのせられることのなかった伝説の流血シーンじゃないか！」

「……」
「ボコシリーズで血が流れたのは後にも先にもあのシーンだけだったんだぞ」
「……」
「なあ、お姉ちゃん勉強したんだぞ。ＴＵＬＴＡＹＡ（トゥルタヤ）で入手できる本編と劇場版、ＯＶＡも全部視聴したんだぞ。全１２７時間３５分。漫画も小説もアンソロも非公式解説本も」
「……」
「すまない。さっきのは責めてるみたいだったな。そんなつもりじゃなかったんだよ。許してくれ」
「……」
「ごめんね。わかんない。お姉ちゃん馬鹿だからわかんない。みほに何をしてあげればいいのか」
「……」
「ねぇ顔はめパネル行こうよ。写真撮ろうよ。撮ってみんなに自慢しようよ。ねえ顔はめパネル。顔はめパネル。顔はめパネル。かおはめぱねる。かおぱめはねる」

かおぱめはねる？

カオパメ跳ねる

ぎゅいいいいいいいいいいいいいいいん

2. Sammein

「はいこれ」
　目の前の明るい髪色の少女はバスケットを手渡してきた。彼女は青色のジャージを着ていた。あれは継続高校のものではなかったか。ほどなくして、私も同じ服装をしていることに気がついた。
「私とミッコは北側の広い森を探すから、まほさんは南側の小さい森をお願いね」
　はて。聞きたいことは山ほどあるのに、しかし私の口からは別の質問が出る。
「あの…『探す』とは一体…」
「え?言ってなかったっけ?コケモモだよ」
　そう言って少女はある方向を指差す。目を向けると、大きなカゴに赤色の小さい果実が入っていたが、その量はカゴの高さの10分の1と言ったところだった。
「もうあんなに減っちゃったんだ。誰かさんが夜中に起き出してはジュースを飲んじゃうから。砂糖も買い足さないと」
　あれがコケモモというのか。
「あれを集めればいいのか」

「うん。そういうことだから、よろしくね」
そう言って少女は立ち去ろうとするが。
「あ」
思い出した様にこちらを振り返り。
「カオパメに気をつけてね」
「カオパメ？」
「そう、カオパメ。頭をコケモモに擬態させて獲物を狩るんだ。怒らせると襲ってくるからね」
なんだそれは。こわいじゃないか。
「携帯電話は持ってる？」
持ってはいるが。一応スマホだ。つい最近買い換えた。なぜ今それを聞くのか。釈然としない顔でスマホを見せる。
「あー、スマホじゃダメだよ。こういうのじゃないと」
見ると、それは薄い長方形がわずかに湾曲した形の黒い携帯電話だった。少女が側面のボタンを押すと、カシャっという音とともに下半分がスライドし、ダイヤルボタンが現れた。ノキア８１１０。何かの映画でみたことがあって、かっこいいと思って名前を調べたことがある（肝心の映画の名前はなんといったであろうか）。

少女は、それをアンダースローでこちらに寄越した。
「カオパメはそれが大好きなんだよ。もしカオパメに遭遇しちゃったら、『Ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｃａｎｎｏｔ　ｌｉｖｅ　ｗｉｔｈｏｕｔ　ｔｈｅ　ｍｉｎｄ』と言って」
「言って」
「そのあとにこれを思いっきり遠くに投げてね」
「投げる」
「そう。思いっきりね。あ、でも、ただ遠くに投げればいいってわけでもないよ。芸術点も考慮されるから」
「芸術点」
「そう。現代社会に対するフラストレーションを爆発させると高得点だよ。…『Ｉｔｈｏｕｇｈｔ　ｉｔ　ｗａｓｎ’ｔ　ｒｅａｌ』」
「…『Ｙｏｕｒ　ｍｉｎｄ　ｍａｋｅｓ　ｉｔ　ｒｅａｌ』」
はて。今私の口から何が。
「分かってるじゃん」
「え？」
「それじゃ、今度こそ。適当なところで切り上げて帰ってきてね」
「あ、ちょっと」

少女は、消えていた。

さて、困った。彼女は『適当なところで切り上げろ』と言ったが。

「…全く適当じゃないな」

私のバスケットは空だった。

南の森に入ったはいいが、コケモモは全く見つからなかった。進むうちに、とうとう森の南端にたどり着いてしまった。森の先には草原があり、それが小高い丘を形成していた。森の外周を回って帰ろうと思って、私は森と草原の境目をうろうろしていた。

かれこれ１０分ほど草原に沿って歩いたであろうか。

「あった…」

ようやく針葉樹の間に茂る赤い実を発見した。

赤い実に手を伸ばす。その時、遠くから弦を弾く音が聞こえてきた。

「何だ？」

丘の頂上。そこにはいつの間にか大きな丸太が置かれていた。そこに座る二人。

一人はチューリップハットを被り、膝の上に琴の様な楽器を乗せて弾いていた。あれはカンテレだ。間違いない。忘れもしない。毎年毎年手を焼かせてくれる継続高校戦車道部隊長、ミカだった。

もう一人は…。

「みほ!?」

隣にみほが座っていた。みほは、あいも変わらずあのりんご飴をなめていた。しかし問題はそこではない。

なぜ二人は肩を寄せ合っているのだ。

寄せ合っているというか、みほの方がミカに体を預けている様にすら見える。

どうしたんだ、みほ。私に懐いてくれないのはわかる。痛いほどに理解している。だからといって、どうして懐く相手がよりにもよってその似非スナフキンなのだ。

ミカがカンテレをみほの膝に乗せる。みほにカンテレのレクチャーをしようとしている様だ。みほはミカに促されるがまま、不器用にポロン、ポロンと弦を弾くと、笑顔を浮かべた。ミカも微笑む。

その時、違和感に気づく。いつの間にかミカはりんご飴を持っていたのだ。ミカは、極めて自然な笑みを崩さないまま、それを口に近づけていく。

べろり。

あっ、ミカ、お前、おい。おい、お前、ミカ、あっ。

豪快にいきやがった。あいつ今ほとんど全面なめたぞ、おい。あっ、かじるなバカ。

信じられん。なんということだ。

込み上げてくる怒りを堪えきれずに、思わず思いっきり地面を蹴ってしまった。
「あ…」
しまった。コケモモを踏み潰してしまった。やっと見つけたというのに。そう思っていると。
不意に、コケモモのあった地面が動いた。
むくり、と地面が盛り上がったかと思うと、中から人型が現れた。身体中がコケに覆われていて、その全容は見えない。
「ぐぐぐぐぐぐぐ」
カオパメ。
「Ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｃａｎｎｏｔ　ｌｉｖｅ　ｗｉｔｈｏｕｔ　ｔｈｅ　ｍｉｎｄ！」
叫ぶ。
「ぐご？」
そいつの顔と思しき部分がこちらを向く。
すかさず携帯電話を取り出し、西住流奥義『たいぎゃ遠くにぶりやるやつ』を発動。私の手から放たれた超高速の携帯電話は、ごうっ、と音をたてて燃え始めた。
「ぐわーーーーーーっ！」

カオパメはそれを追いかけて行った。
ふう。我ながらうまく行ったのではないか。
しかし、問題に気づく。このままではカオパメは携帯電話を追いかけて北の森まで行ってしまう。あの少女が危ないではないか。連絡しなければ。スマホを取り出すが、しまった、そういえば彼女の番号を知らない。というか、このスマホなんだかおかしい。なんか曲がってるぞ。あれ？
ノキア８１１０。
なんでここにあるんだろう。
「あ」
間違えた。思いっきり間違えた。私は自分のスマホを投げたのだ。
私はその場に崩れ落ちた。
そのとき。
「落し物ですよ、西住まほ殿」
背後から声がした。
振り向くと。
カオパメがいた。
私は驚愕した。あの速度で投げた物をこの短時間のうちに回収したことにでもなく、

カオパメが人語を解したことにでもなく。
　コケがとれて顔が露わになっていた。西絹代だった。

　彼女は、私の手からノキア８１１０をひったくり、んんんんん、などとよくわからないうめき声をあげながらひとしきり頬ずりした後、満足げな顔で、右ポケットにしまった。そして、左ポケットから焦げて真っ黒になったスマホを取り出し、私に見せながらカオパメ、もとい西は言った。
「あなたの投擲は素晴らしいものでした。飛距離１１３５８ｍ。世界記録です」
「世界記録」
「それだけではありません。芸術点も高かった。あの名台詞によるあぷろおち、投擲姿勢、現代社会に疲れてる感じ、全て完璧です」
「あぷろおち」
「隕石ぼおなすも付きますね」
「隕石ぼおなす」
「しかし、ただ一つ。とても残念なことがございます」
　カオパメは一息置く。
「すまほはこの大会においては、れぎゅれえしょん違反です」

「れぎゅれえしょん違反」
「のきあハチヒトヒトマルのみが許されております。よってあなたは失格です。失格者は……」
　みしっ、という音がした。あら。彼女はそこそこ長身ではあるが…こんなに高かったかしらん。というか、私の方が高かったはずでは。みしみし、みし。あらあら。これは、見上げ入道か何か？みしみしみしみし。彼女、今や大洗マリンタワーぐらいあるのだが？
「……捕食されます」
　おやぁ？

　ずがぁぁぁん。ずがぁぁぁん。（すごぉく重厚な足音。爆音上映せよ）
「に～げ～る～な～」
「うわあああああああ」
　あのなあ。仮にも黒森峰の隊長である私がカオパメもとい西もとい巨人に追い回されているのだぞ。だのに、何の救援もよこさぬとはどういうことだ。おい、ミカ、お前のことだぞ。お前のことだぞ、ミカ、おい。何みほと楽しそうに傍観してやがる。あっ、あんのやろう今こっち指差したぞ。あいつ楽しんでやがる。冗談じゃなく命の危機な

のだぞ。え？命の危機、傍観、救援？あっ。
そのとき。森の中からエンジン音が響く。
ぶろおおおおおん。（以降、別に爆音でなくとも可）
「おらああああ段階を踏まずにいきなりクリスティー式じゃあああ」
待ってました救世主。ＢＴ―４２。操縦席には赤い髪の少女。砲塔からはあの明るい髪の少女。
「待っててね、今からその子をおとなしくさせるから！」
ばあああああん。
何と。実弾撃ってきた。生身の人間がいるんだぞ。あと、人と呼べるかはかなり怪しいが一応人っぽい何かもいるんだぞ。
その弾は私の頭上を通り過ぎ。
がきいいいん。
巨人の右ポケットに命中した。右ポケット。あ。
ごん。
鈍い音がした。走りながら振り返ると、そこには落下した巨大なノキア８１１０の残骸が。へえ。所持品ごと大きくなるのか。そうじゃない。
「うおおおおおお」

余計怒らせてどうするんだ。

「次は外さないよ！」

ばあああああ　あ　あ　お　お　　お

世界が、スローモーションになる。徹甲弾が、衝撃波を発生させながら飛んでいく。

（衝撃波って見えるのか？）

しかし。

どぅおお　お　お　　お　　お　　（超重低音の大地がえぐれる音。１００Ｈｚくらい。そこそこのスペックのスピーカーを用意せよ）

カオパメが、跳ねた。

背面飛びだ。

徹甲弾の衝撃波が、障害となるバーを作っていく。巨人はそれを、まさに陸上競技のそれで飛び越えていく。

飛び越えていったその先に、ミカとみほがいた。

みほはミカと一緒に私を指差していた。表情は見えなかった。

巨人の足は、ちょうどミカとみほの真上にあった。

「ミカ、みほ！退け！退くんだ！退かないと踏まれるぞ！」

退かないと踏まれるぞ

どかないとふまれるぞ

土管Ｎｉｇｈｔ／踏まれるゾウ

ぎゅいいいいいいいいいいいん